

坂戸市提案型協働事業

「粟生田・泉町の昔を伝承する活動」

粟生田・泉町地域のむかしばなし

講演会資料



とき：平成 27 年 1 月 18 日

ところ：泉町第一集会所

講演者：田 中 一 郎

おおもへのあたゝあかお
大伴部直赤男

(七六九)
— 神護景雲二 —

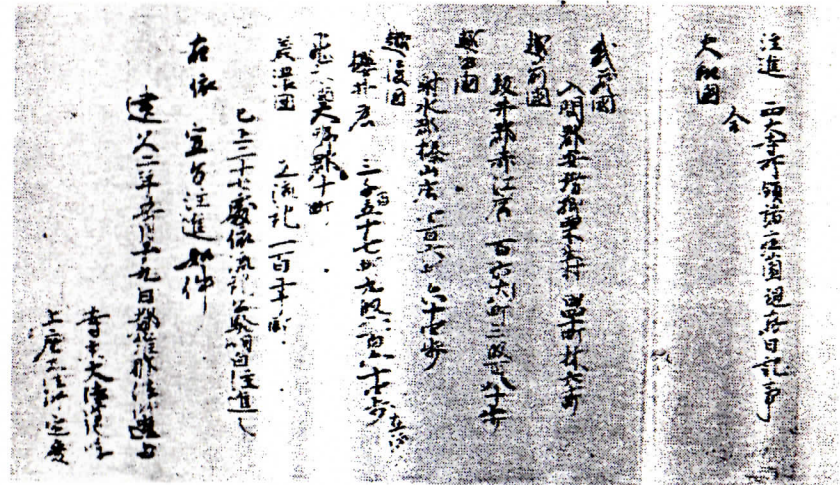
建久二年に作成された奈良西大寺の荘園目録に、「顛倒庄々」かつては寺領であったが、現在では寺領としての実体がなくなっている庄園)の一つとして「武蔵国 入間郡安堵郷栗生村田四十町林六十町」の地がしるされている。安堵郷栗生村については、川越市上戸をはじめ諸説があつたが、市内の吉田から赤尾方面にむかつて「あとがわ」という川が流れていたことが『小代文書』によつて知られ、栗生村は栗生田村の誤記であろうとされて、最近では市内にあつたとする説が有力になつている。

それでは、この百町にもおよぶ広大な土地は、いつ誰の手によつて西大寺に寄進されたのであろうか。じつは六国史の一つである『続

日本紀』宝龜八年六月五日の条に「武蔵国入間郡人大伴部直赤男、以神護景雲二年、獻西大寺商布一千五百段、稻七万四千束、墾田四十町、林六十町、至是其身已亡、追贈外従五位下」という記事がある。西大寺・墾田四十町・林六十町とあれば、まさしく安堵郷のそれと同一であり、栗生田周辺には奈良時代からこのような膨大な資産を施入できる豪族がいたことがわかる。

大伴部直赤男については、続日本紀の記事以外は全く不明であるが、赤男のように中央に直結する力を蓄えていた人物が坂戸にもいたという事は、さして離れていない石井に残る勝呂廃寺や、入西地区の条理制遺構などの奈良時代の遺跡とあわせて、当市の文化が早くから開けていたことを示すものであるといえよう。

(岩城 邦男)



西大寺所領荘園注文(標題と武蔵国の庄園名記載の部分)
『埼玉県史研究』第一号より転写

武蔵国吉田郷の尼

(一一二五三)
一 建長五

鎌倉時代中期の浄土教系の念仏者。金沢文庫本『念仏往生伝』に、多年にわたる念仏(南無阿弥陀仏と唱えること)の功德により、臨終に際し瑞相(すいそう)があらわれて無事往生をとげたことがしるされている。

それによれば、かの尼は四七歳で出家し念仏三昧の日々を送っていたが、六八歳になった建長五年(一一二五三)十一月六日、かねてからの持病が再発し、九日になって子息にむかい「じつは九月一日の晩に、大勢の尊い仏に囲まれる夢を見、また昨日より私の眼前に青蓮の花があるように見えるのです。」と語りかけ、一ヶ月経た一二月一日、再び子息に「眼をつぶると、善導和尚(げんどうわしやう)極樂往生への道を説く高僧)が枕もとにお立ちになっ

るのが見え、また蓮の花も見えます。この時は、まことに心がすがすがしく、からだも楽になったような気がします。」と話し、その日の戌の刻(午後八時)に「臨終はまだです。卯の刻(午前六時)に私は身罷るでしょう。」と死ぬ時刻を予言したという。

そのまゝ、子の刻(午前〇時)になっても念仏をやめず「臨終はまもなくです。お迎えの仏もすぐそこまで来ておられます。」と言いい、さらに一心に念仏を高声でつづけていたが、ようやく卯の刻になり、念仏の声絶えたかと思うと、なおも南無阿弥陀仏と唱える口もとだけが二十余遍も動きつづけ、静かに息を引きとっていったと書かれている。

鎌倉時代初期に法然が出て熱心に浄土教を説き、武蔵武士の中にも熊谷次郎直実のように強烈な浄土教信者があらわれたが、中期になつて板碑の造立が始まるとなお一層浸透するようになり、初発期造立の板碑には浄土教思想をあらわす阿弥陀如来信仰をしめしたも



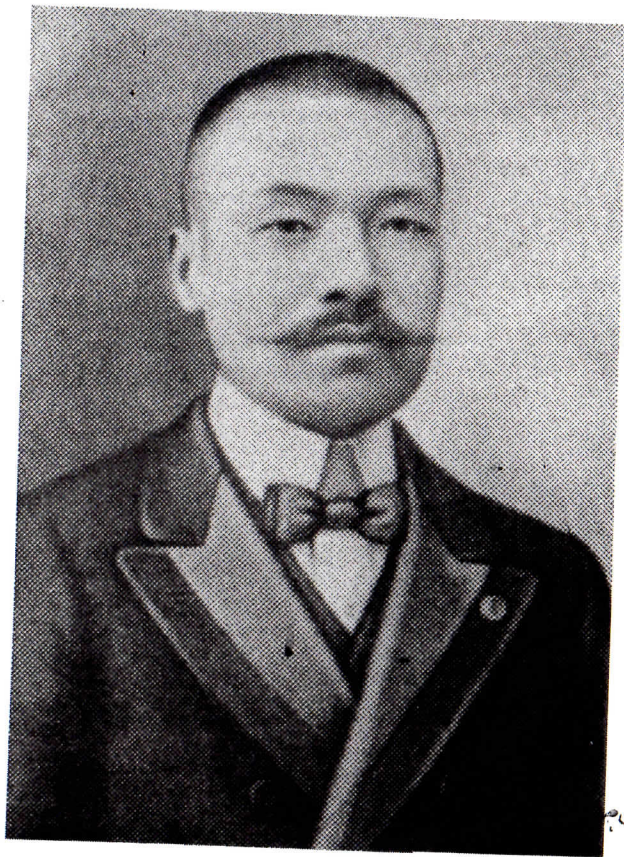
のが非常に多い。

県内には吉田と称する地名が数ヶ所あり(秩父郡吉田町、嵐山町吉田、川越市吉田など)、この尼が住んでいた吉田郷をいずれとするか特定しがたいが、尼が没した時代の板碑分布や武士団の動向から考えると、初発期板碑の造立者でありまた浄土教信者でもあった小代氏一族が所領としていた坂戸市吉田が、もっともふさわしい地と考えられる。鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて異常なほど造立された勝呂地区の六字名号板碑も、この尼のような熱心な念仏者の影響が大きかったのであろう。

(岩城 邦男)

新井 弥曾吉

(一八六九) (一九四三)
明治二一 昭和一八



新井弥曾吉肖像

上手だったと今でも言い伝えられている。大正五年に坂戸青年団ができる、団長に推されて青少年の育成に努力された。そのころ生家が火災に遭ったが、子息が三光町で精米業を開業していたのでそこに移り住むようになった。学校を退職した後も町の助役、学務委員、坂戸神社の氏子総代など要職に就任し、町のため尽力したその功績はまことに大きかった。

(黒瀬 滝治)

明治二年(一八六九)七月一二日に粟田の農家に生まれた。同一八年に坂戸学校の高等科を卒業して坂戸学校の先生になったが、二年後尋常師範学校入学のため退職した。同二四年師範学校を卒業すると再び坂戸学校の先生になり、それから大正六年まで二七年間坂戸小学校に勤務したが、その内一七年間は校長であった。その間、明治三年に公立小学校に学校医を置くことが定められたが、県下の多くの学校では適当な医師がいなくて、学校医を置いた学校は極めて少なかった中で坂戸では先生の努力により新沢文輔氏が校医に就任した。また、同三三年四月坂戸町同窓会が新井校長指導のもとに設立され、大正九年青年団成立まで続いた。四一年にはりっぱな校旗が制定され、四三年一月に町の有志が相談して教育の普及進展のため坂戸町教育会が発足すると、会員から推されて初代の会長に就任した。三大節の式場で教育勅語の奉読に際しては、生徒たちの間では埼玉県で一番





綿貫 常太良

(一八七二)

— (一九五二)
昭和二六



綿貫 常太良

「くるまの大将」綿貫常太良氏は粟生田の水車屋（水車利用の精米・製粉業）綿貫順治の長男として明治四年に生れた。

一五の時、父に死なれたが借財のため田畑一切を抵当にとられ貧窮の中で母や五人の弟妹の面倒をみるという苦しい生活を余儀なくされたらしい。でも勤勉力行の氏は、三〇才ごろには負債を完済し、かなりの資産を残すまでになったという。

その後推されて町議会議員になり、県議会議員であった小川倉次郎（長岡）木藤謙吉（仲町）氏らとも親しく交わったが地方政治にあきたらず、議員生活は一期で投げ出して国事国政に関心をもち衆議員議長粕谷義三氏にかわいがられた。

さらに秋山好古大将、佐藤鉄太郎海軍中將ら内外の名士との広い交流もあった。

晩年になって書いた自筆の「回顧録」は国政の動きと所感で埋めつくされ、天下国家の行く末を案じた氏の面目躍如たるものを示す

が、その私生活は「時間は生命なり」を信条とする厳しいもので、一日とて遊びむさぼることなく至誠一貫、こうと信じたことは必ずやり通すという強い気迫にみちたもので、多くの人から畏敬されたのである。

昭和初年の不況時には、みずから提唱して「坂戸町積善会」を設立し、農事ならびに福利増進に奔走したが自分自身も水車業をあきらめて養鶏に転じ晩年には「玉子屋の爺さん」として親しまれた。

昭和二五年八月、急に「余の人生もあと半歳、今日よりは人間生活を打切り仏道に入る」と喝破して他出せず、それから半年後の昭和二六年一月三一日午後五時五分「さあ行こう」とつぶやきながら目をつぶり八〇才の生涯をとじた。

（大図 口承）

(二八九四) — (二九六五)
 明治二七 — 昭和四〇



利根川 宇平

宇平さんは、明治二七年四月に三芳野村大字青木の田中時次郎氏の四男として生れました。

当時の農村の風潮もあってか尋常小学校を卒えると坂戸の中村屋呉服店に奉公し、そこで宇平さんは篤農家の中川伊与吉氏(坂戸人物誌第一集所載)に師事、改良農具の実験や養蚕、麦作の多収穫栽培技術の指導も受けたのである。

その後は、いまの日の出町にあつた和泉屋に傭われ、ひとついくらというちようちん貼りにも精を出したという。

ところが大正一〇年、たまたま世話をする人があつて粟生田のせんべい屋の養子に迎えられ、鶴ヶ島の高沢ふじさんを嫁に迎えました。でもその年に粟生田の大火があり、青蓮寺をはじめ数軒の農家もことごとく焼失してしまいました。

そのお寺の隣りに住んでいた宇平さんは、農業のかたわら相変らず日雇いのつつましい

生活でしたが、その中で男二人、女三人の子どもをもうけます。

さて村では、焼失した寺の再建をしましたが無住であるため庫裡や墓地も荒れ果ててそれこそ狐や狸の棲み家になっています。この有様を苦慮した檀家総代は、熱心に頼みこんで宇平さんを寺男にしました。昭和五年のことだそうです。

かくて頑固一徹な宇平さんは、兼務住職であつた越生法恩寺の先代安西海琳師と現在の昌琳方丈に二代三〇年仕え、檀家まわりには挟み箱をかつぐお供衆になり、平常は寺および墓域の留守番としてその職分を全うしました。

酒が好きで、チビリチビリなめては青蓮寺の庫裡そうじをしていた宇平さん。

墓地でいたずらをする悪童たちをうなりとばしてニラミをきかせていた宇平さんも、昭和四〇年二月三日、脳いっ血で死亡、七十一才の生涯をとじました。(田中 一郎)